

【添削課題】

出典…中央大学・総合政策学部・00年度

解答

筆者は「集団主義社会は安心を生み出すが信頼を破壊する」と主張する。

人々が集団の内部で協力しあっている程度が、集団間で協力しあっている程度よりもずっと強い集団主義社会の内部では、相互協力が簡単に成立している。それゆえ、集団内部の仲間と付き合っている限りは、人に利用されたり搾取されたりすることを警戒せずにすむが、自集団の仲間うちを越えた他者一般や人間一般に対する信頼が育ちにくくなる、と考えているのである。

そして、これまでの日本社会は閉鎖的集団主義型の安心社会を確立することで、社会や経済の効率的な運営を達成してきたが、今後は人々の間に特定の集団や関係の枠を越えた一般的信頼を醸成することで、開かれた機会重視型の社会へと転換してゆく必要がある、というのである。

確かにこれまでの日本の社会は、筆者が述べているように外部に対して閉鎖的で固定的な組織や集団をあえて形成し、そうした集団の内的な凝聚力と安定性を核に据えて経済的発展を実現してきたといえる。終身雇用制や年功序列制という日本独特の雇用制度は、人々が一生涯をある特定の企業の中だけで過ごし、終生を一企業に捧げることが美德である、という欧米諸国では考えられない倫理観を生み出すこととなつた。

だが、その結果自分の会社の利益のためであれば、社会全体の利益を損なつても仕方がない、という閉ざされた価値観が形成され、企業活動が多く的一般市民や社会一般の信頼に対する重大な背反行為につながるという事態も頻繁に見られるようになつた。高度成長期の公害にしても、近年の不良債権問題にしても、結局は、このように日本の柔軟性を欠いた雇用制度と企業組織のなかで、社会一般に対する倫理意識と責任への配慮が人々の間から失われてしまつていたための事態であろう。

しかし、人々がいつのまにか社会全体に対する誠意や責任を見失つてしまふような閉鎖的制度によつては、より長期的には健全な活力に満ちた社会を形成し、実現していくことは困難だ。

筆者のいう開かれた機会重視型の社会に転換することは、人々を自立した社会一般に対する責任と倫理意識を明確なものにして行くためにも極めて重要な意義を有していると、私は考えるのである。

解説

1 設問要求

- ① 課題文を簡潔に要約して示す。
- ② 課題文に示された筆者の見方に対する賛否を含めて、これから日本社会のあり方について自分の意見を述べる。
- ③ 一〇〇〇字以上一二〇〇字以内にまとめる。
- ④ 論旨を明快にするため段落をつける。

2 課題文の読解

まず、段落に沿つて課題文全体の論旨を読み取つていこう。

◆課題文の中心的なメッセージ＝集団主義社会は安心を生み出すが信頼を破壊する。

◇「集団主義社会」の定義

＝「内集団ひいき」の程度がとくに強い社会（＝人々が集団内部で協力しあつてゐる程度が、集団間で協力しあつてゐる程度よりもずっと強い社会）

◇「集団主義社会」の典型例とその特徴

＝近代以前の伝統的な村落共同体・社会学でゲマインシャフトと呼ばれている共同体的社會（→家族）

|| 集団の内部では相互協力が簡単に成立している。内部だけでつまっている限りは、人に利用されたり搾取されたりする」とを警戒する必要がない。

◇「集団主義社会が安心を生み出す」という側面

|| 従来の日本のビジネス関係||取り引き相手との間にまず「信頼関係」を作り上げる

↑時間がかかるが、いつたん「信頼関係」が成立すれば、その関係内部では強固な協力関係が存在するため、契約書で身を守らなくても安心して取り引きができる。||**集団主義的な関係**→【関係内部で安心していられる関係】

◆「集団主義社会」のマイナス面を考える意義

||「信頼を破壊する」という面を考えることが、これから日本社会のあり方を考えて行く上で重要な意味を持つ。

◇「集団主義社会の閉鎖性」

||仲間うちでは安心していられるが、仲間を越えた他者一般や人間一般に対する信頼が育ちにくくなる。

◇「これからの日本社会

||これまでのように関係を外部に対して閉ざすことで関係内部での協力態勢を確立していくやり方→社会・経済的効率の達成の足枷になっていく。

◇一般的信頼の重要な役割

||信頼は、人々の間の結束を強める関係強化の側面と同時に、人々を固定した関係から解き放ち、新しい相手との自発的な関係の形成に向かわせるという側面もある||【関係拡張の側面】

◇「日本社会の変質

従来||集団の凝集性を高め、外部に対して閉ざされた関係の内部で相互協力態勢を確立し、社会や経済の効率的な運営を達成

現在||関係を外部に開くことの効用の方が大きくなつた

◇「取り引きコスト」の重視……

従来||「取り引きコスト」の節約||特定の相手との間の安定した取引関係の確立・終身雇用制における雇用者と被雇用者と

の間の安定した雇用関係など。

↓新しく別の相手と取り引きをすれば得られたはずの利益——現在の相手との取り引きで得ている利益——【機会コスト】

◆「機会コスト」の増大

＝現代の日本社会では、経済やビジネスの分野のみならず、あらゆる領域で機会コストが急速に増大しつつある。

◇日本社会転換成功の鍵

＝従来の【閉鎖型】ないし【集団主義型の安心社会】から【開かれた機会重視型の社会】への転換に成功するかどうかが鍵
＝人々の間に特定の集団や関係の枠を越えた一般的な信頼が醸成されるかどうか→どのようにしてそのような一般的な信頼を醸成
できるかが社会科学や人間科学に与えられた重要な課題の一つ。

3

課題文の考察

① 答者的基本的な立場

筆者の立場と主張は極めて明解である。これまでの日本は外部に対して閉鎖的で、内部的な信頼関係を形成することで、「関係内部で安心していられる関係」を確立し、その内部での相互協力態勢に基づいて社会や経済の発展を実現してきた。つまり「集団主義社会」のシステムによって現在に至る社会的・経済的発展と繁栄を達成してきたというのである。

そのため日本の社会はあらゆる領域に「集団主義的」な制度や慣行、価値観が浸透している。筆者があげている企業間の取り引き慣行や終身雇用制の他にも、たとえばどの会社のなかにも存在する学閥（同じ大学の出身者同士での私的相互協力を買う集団）や派閥、自分の地域内の利益を重視する地域行政の在り方、社会・経済制度の異なる国に対しても冷淡な外交政策など、日本の社会や国家のあらゆる領域に、集団主義の閉鎖的傾向が見て取れる。

だが、このように閉鎖的で内部にしか目を向けない構造においては、必然的に人は外部に対する猜疑心を強くすることになる。
また、従来の安定した固定的な関係を壊す危険を冒してまで新しい関係を求めることが不安や躊躇を覚えることにもなる。それゆ

え、ひろく外部一般に対して開かれた信頼を持つことのできない集団主義社会は、周囲の状況が大きく変動して行く時代になると、柔軟に対応することができず、窮屈して行かざるを得なくなる。筆者がこれからの日本は集団主義社会からの転換が必要であると考える背景には、世界全体の関係や状況が大きく変化しつつある現状への認識が存在するのである。

② 「取り引きコスト」と「機会コスト」

課題文の中で重要なキーワードとして用いられている「取り引きコスト」と「機会コスト」という言葉の意味を整理しておこう。

【取り引きコスト】

特定の相手と安定した取り引き関係を形成し、確立し、保持するために必要とされるコスト（＝手間・労力・経費・犠牲など）。日常生活の場面ではお中元やお歳暮なども「取り引きコスト」の面を持つ慣行である。また、従来からの取り引き先との関係を維持するために、別のもっと利益の高い新規の契約を結ぶことは断念する、などといったこともしばしば行われている。これは長期的な安定した取引関係の方が、結果的には大きな利益を得られるという判断に基づいた選択である。

【機会コスト】

〔新しい相手と取り引きをすることで得られたはずの利益〕－〔現在の相手との取り引きで得られている利益〕を指す。社会的・環境的変動が少なく、固定的な状況が続く場合には、固定的関係によって得られる利益が大きいので、機会コストは低いが、社会的・環境的な変化が激しく大きい場合には固定的関係によって得られる利益は小さくなるので、機会コストは高くなる、と筆者は考えている。

③ 社会的・環境的变化の具体的内容

課題文では、日本の社会が直面しつつある社会的・環境的変化について、具体的に述べられてはいないが、次のようなことが念頭に置かれているものと考えられる。

(1) 日本経済の深刻な経済危機

バブルの崩壊に端を発した経済危機は、いまだに厳しい状況が続いている。そのなかで、現在日本の経済構造自体を再構築する必要性に迫られている。いわば、日本が経済的に生き延びるための徹底した変革があらゆる経済領域で求められているわけで、その変革に対応できるか否かがまさに各企業にとつても個々人にとっても死活問題となっているのである。

そのなかでたとえば従来の終身雇用制や年功序列制といった雇用システム、親会社と子会社との固定的契約関係など戦後の高度成長の背景となつた日本独特の制度の見直しも進められている。

(2) グローバル化の進展

世界経済の緊密化と一体化がこれまでにない規模と速さで進行し、日本もまたそうした「グローバル化」の波に対応する必要がてきた。多様な文化や伝統を有し、様々に異なる政治・経済制度やビジネス慣行を持つ国々との商取引・経済取り引きが不可欠となつたのである。

こうした時代的な変化に対応するには、これまでの集団主義的な発想では対応しきれない。集団主義的手法は、同質性の高い者同士でなら有効に機能するが、異質の価値観や慣行を持つ者同士では有効性が期待できない。

この点からも、日本の社会は変化を求められているのである。

4 答案作成へのアプローチ

① 要約

まず設問では、課題文の内容を簡潔に要約することが求められている。課題文の読解を参考にしながら課題文全体の基本的な内容を確認し、整理してまとめてみよう。

整理にあたっては、自分の言葉に恣意的に言い換えてしまうのではなく、課題文の中で用いられている筆者の言葉や表現を最大限に活用してまとめることが望ましい。特に、「集団主義社会」の定義や内容、「取り引きコスト」と「機会コスト」などといった

重要な語彙の記述に際しては、筆者自身の説明を利用する方が内容的に課題文の趣旨から外れる危険が少ない。

内容的には、従来の「閉鎖的集団主義型の安心社会」がもはや限界に直面しており、より一般的な信頼関係に基づいた「開かれた機会重視型の社会」へと転換していくことを現在の日本の社会は迫られているのだ、という筆者の基本的な視点が明確に示されている必要がある。

以上の点に留意しながら誤字や脱字にも注意して要約部分を作成して欲しい。

② 考察

設問には「この文章に示された見方に対する賛否を含めて、これから日本社会のあり方について意見を述べなさい」とある。つまり、漠然としたかたちで意見を述べるのではなく、筆者の主張に対する肯定・否定を明確に示し、論点を具体的に絞り込みながら自分自身の見解を論じていくことが求められているのだ。

例えば、筆者は日本の従来の雇用制度を改革する必要があると考えている。閉鎖的かつ固定的なこれまでの雇用制度では、真に実力を持つた人材が育たないし、また新たにそういう優秀な人材を途中採用することも難しいからだ。確かによほどのことがない限りクビになることもなく、勤続年数に応じて一定の地位と昇給が保証されているような境遇であれば、次第に積極的に自己向上させ、新しい仕事に挑戦しようとする気概も薄れてくるかもしれない。このような傾向が企業全体の傾向になってしまったらば、その経営効率は極めて低いものになってしまう。そして、経済危機と国際化という激しい経済環境の変化に対応して行くことも困難になってしまうだろう。それゆえ、筆者の主張するように、より個々人の実力と実績を重視する雇用制度に転換して行くことが望ましい。そして、固定的で閉鎖的な雇用制度の改革は、日本の社会により一層の柔軟性と開放性とをもたらしてくれるだろう、と肯定的に論評することが可能である。

一方、経済的苦境の時期であるからこそ、強引に従来の制度や慣習を切り替えて行くことは危険が大きすぎると批判的に論じることもできる。例えば、現在のような先行きの見えない時期に終身雇用制などの安定と信頼関係に基づいた制度を改めて行くことは、大半の人々にとっては生活や将来への不安しかもたらさないことになるのではないか。そして、自分がいくら一生懸命に仕事を励んだとしても、会社側の事情でいつ自分の立場が危うくなるか分からぬといふのであれば、それこそ主体的に誠意を持って仕事に取り組む意欲も薄れてしまうだろう。筆者の「開かれた機会重視型の社会」という言葉は、響きは良いが、実際には弱者切

り捨て社会の美名にすぎない。日本の社会は、確かに現在経済的難問と国際化という大きな課題に直面しているが、だからこそいたずらに欧米的な制度を断片的に導入しても意味がない。人間はまず生活の安定と将来への展望が保証されて初めて重要な課題に誠心誠意取り組んで実績をあげることができる。日本の社会はそうした人間の本質に即応した制度を発達させてきた。日本の社会は、この他の国には見られない独自の制度の長所をもつと評価し、今後も維持していくべきである。……などと筆者の主張に反論することも可能である。

さらに全体として、①単なる制度的考察に終始せず「日本の社会のあり方」に対する考察まで論を進めること、②雇用制度・学校制度・政治制度など何らかの具体的な事例を引用しながら考察をしていくこと（抽象論では論文としての具体的説得力に欠ける場合が多い）、③筆者に対する賛否は明確に示すこと（あいまいな姿勢はとらないこと）、などの諸点に留意して答案を作成して欲しい。